

伝 世

銅鏡など威信財（単なる「道具」ではなく、所有者の地位や権力を表象する器物）の一部には、製作年代と埋納年代に数百年の隔たりがある、「伝世」資料が存在します。この背景には、器物がもつ希少性や象徴性を、共同体の長が自らの権威付けのために利用し、首長の世襲にともなって代々受け継いだ、という現象が考えられてきました。しかし近年、その解釈に再検討の動きが進んでいます。

紫金山古墳から出土した中国製の方格規矩四神鏡には銘文が刻まれており、王莽がおこなった新の時代（8～23 年）に製作されたことが分かります。しかし、他の副葬品の型式を見ると、紫金山古墳の築造年代は4 世紀前半と推定され、鏡の製作と古墳の築造の間には、約 300 年の開きがあります。

同じく、東大寺山古墳から出土した鉄刀には、後漢の年号である「中平」（184～189 年）が刻まれていました。古墳の年代は4 世紀の半ばと考えられているので、この刀は製作後、150 年ほどたってからようやく副葬されたということになります。